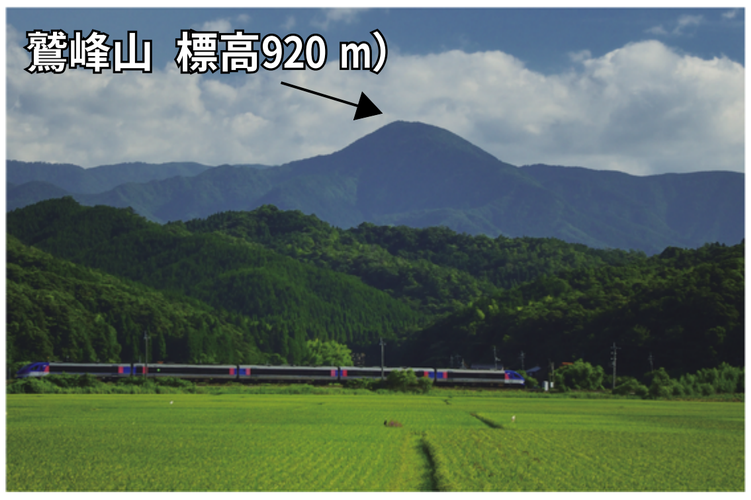
鷲峰山（じゅうぼうさん）と大山（だいせん）の背比べ』を地球科学的に検討してみた

鳥取県立山陰海岸ジオパーク海と大地の自然館　金山恭子

鷲が羽を広げたように東西に尾根が延びる鷲峰山は、鳥取県鳥取市のシンボル的な山です。この地域には、鷲峰山（920m）と鳥取県西部の大山（1729 m）が背比べしたという伝説がいくつも残っています。このお話を地球科学の視点から見てみたいと思います。



鷲峰山と大山の背比べ

（引用：山陰海岸ジオパーク散策モデルコース「勝部不動滝コース」）

全国の神様達が集う出雲の国の行事が終わった帰り道、鷲峰山と大山の神様が互いに自分の方が背が高いと言い争いになり、背比べをした結果、鷲峰山が勝ちました。負けた大山の神様は悔しがり、杓子で鷲峰山の頭をすくい取りました。これに鷲峰山の神様は大いに怒り、それに気づいた大山の神様が慌てて逃げようとした途端、杓子についていた土が落ち、鳥取市青谷町の建山になりました。さらに、鷲峰山の神様が「土はもうないのか」と怒鳴ったので、大山の神様は袖を振ってみせたところ、残っていた土がどさっと落ち北栄町の振袖山になりました。

2つの山の共通点は？

まずは地質図を見てみましょう（図１）。背比べをした鷲峰山と大山には「火山の噴出物」でできた山という共通点があります。大山が慌てて逃げるときに落とした「建山」も火山の噴出物でできています。

鷲峰山周辺に大きな火山があった？

鷲峰山はそれ自体が火山ではなく、かつて付近のどこかにあった火山の中心部から流れ出した溶岩が、長い年月の間に侵食され、現在の形になりました。鷲峰山を含む鳥取県中～東部には、溶岩などの火山岩が広く、厚く分布しているため、かつて大きな火山（例えば大山の様な）があったか、小さな火山がたくさんあった（火山群）と考えられます。

鷲峰山を含む鳥取県東部の鮮新世以降の火山岩の年代を調べたところ、およそ800万年前から100万年前にかけて断続的に噴火したことがわかりました（図２：金山・菅森, 2021など）。一方、大山は約100万年前以降に活動を始めた火山です（Kimura et al., 2003）。

図１　鳥取県と周辺の地質図
国土地理院陰影起伏図に産総研シームレス地質図を重ねて表示

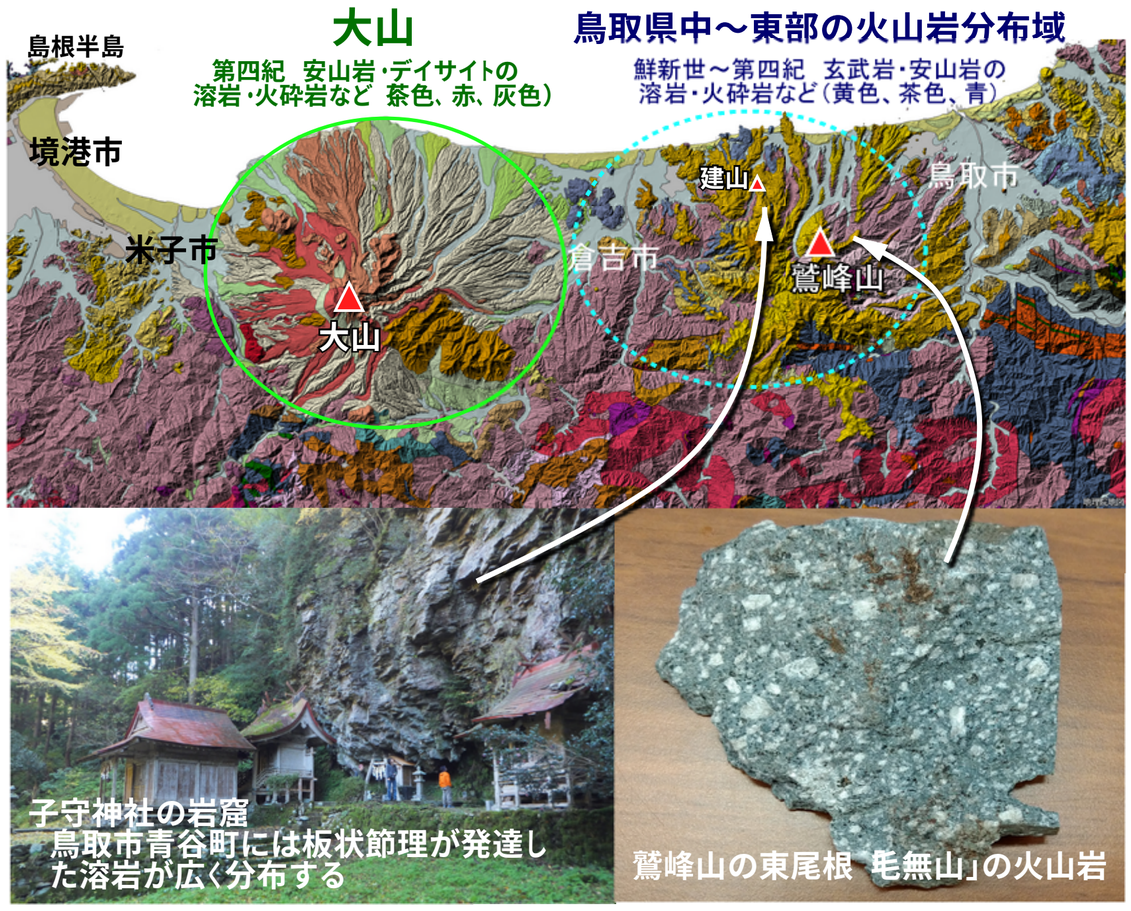


図２　大山と鷲峰山を含む地域の火山岩の年代
【プロットに用いた文献】金山・菅森（2021），鹿野・中野 (1985), Kimura et al. (2003), 木谷・岩本 (2004), Pineda-Velasco et al.(2018), 津久井ほか (1985), Uto (1990), 宇都ほか (1994)

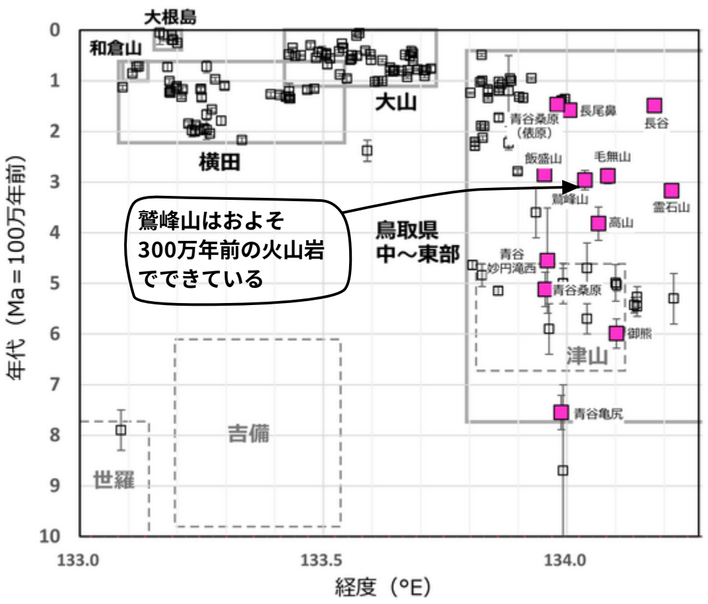


図３　日本周辺のプレートと火山の分布
気象庁HPの図にプレートの情報を加筆。

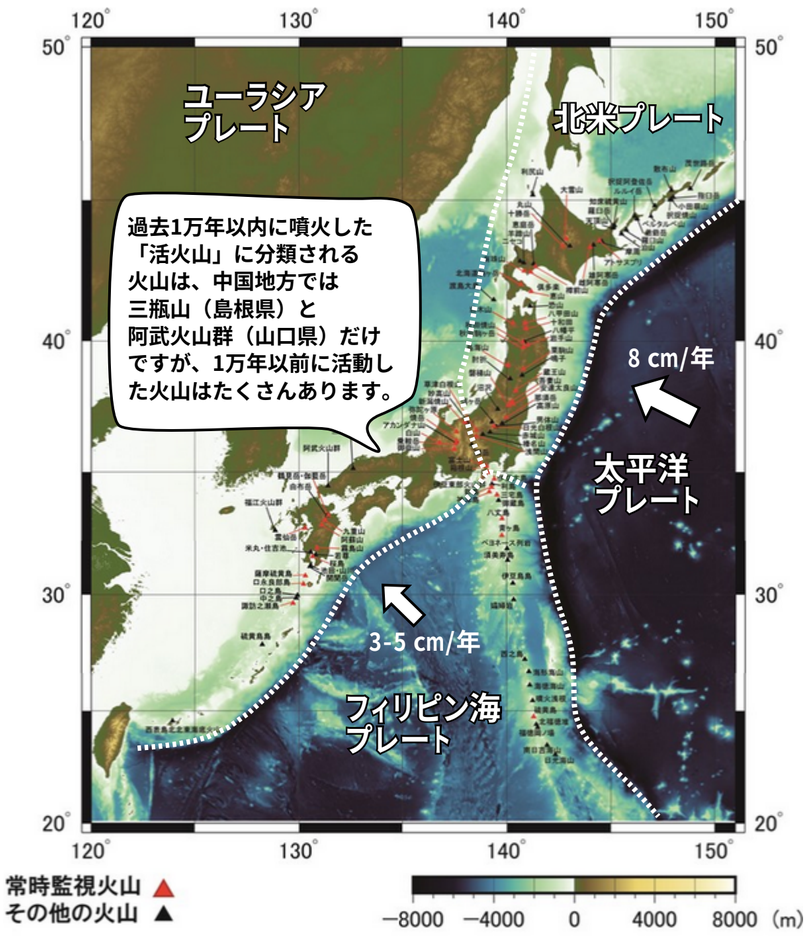
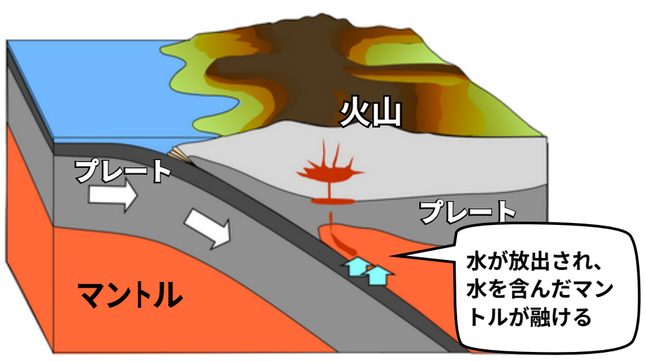


図４　沈み込み帯のマグマ発生のしくみ



鷲峰山と大山、マグマが生まれた仕組みは同じ

日本列島はプレートが他のプレートの下に沈み込む場所にあります（図３）。プレート沈み込み帯では、地下で沈み込んだプレートから水が放出され、マントルの岩石を融けやすくするため、マグマ生まれ、火山ができます（図４）。大山も、鷲峰山を含む鳥取県中～東部も、フィリピン海プレートがユーラシアプレートの下に沈み込むことで発生した火山です。

＜私の感想＞

鷲峰山と大山はできた時代が異なりますが、その火山を作ったマグマは、同じフィリピン海プレートの沈み込みによって生まれたものです。その意味で、２つの山は仲間同士で先輩・後輩関係にあったのですね。

鷲峰山が長い年月をかけた侵食により今の形（大山より低い山）になったことが、大山が鷲峰山の頭をすくい取ったエピソードとリンクしているようで面白いです。

もしかして、このお話には昔の人の自然に対する鋭い観察眼が反映されているのでは・・・？